

第1回「言語教育評価フォーラム」講演3

## 日本語能力試験改定の中間報告

大隅 敦子

国際交流基金日本語試験センター設立準備室\*

### 1. 日本語能力試験 — 開始から現在まで

日本語能力試験(The Japanese Language Proficiency Test, 以下 JLPT と略す)は、学習段階に対応する4つの級別を実施され、各級は文字・語彙(100点)、聴解(100点)、読解・文法(200点)の3類構成、合計400点満点で結果が表示される。1984年には受験者7,019名であったのが、直近の2007年12月の実施では、受験者数は523,360名にのぼった。また当初15ヶ国・地域、21都市であった受験会場も、2007年度には51ヶ国・地域、155都市と大きな拡大を見せている。

さらに試験開始後20年を越え、その間の応用言語学や日本語教育学、そしてテスト理論の発展・普及、ならびにデータの蓄積を踏まえて「課題遂行能力とそのためコミュニケーション能力を測る」試験への改定を視野に入れた調査・研究が現在進められている。ここではその中の一部を、先ごろ2008年5月の日本語教育学会にて行われた「日本語能力試験 改定中間報告」で提示された改定報告に関連して、2つの研究成果を報告する。

### 2. 日本語能力試験が測る「日本語能力」とは

#### 2. 1. 垂直等化 — 改定ポイント：レベルの設定

日本語能力試験では異なる級は独立に存在している。これらの相互比較を可能にするために、IRT(項目応答理論)を取り入れ、4つの級別に構成されたIRT尺度を単一の共通尺度上に変換する「垂直等化(vertical equating)」という操作を行った。ここでは、本試験とは別にモニター試験を実施し「共通受験者デザイン」を適用してJLPTの4つの級を垂直等化した結果について報告する。

\* 発表当時(現在は国際交流基金日本語試験センター)

本研究では等化するテスト間を繋ぐ情報を得るために「共通受験者デザイン」を用いたが、具体的には JLPT2001 年度 1 級および 2 級から問題項目を抽出しモニターテスト A を作成、同様に 2 級と 3 級からモニターテスト B を、3 級と 4 級からモニターテスト C を作成して、テスト A を 2005 年度 JLPT1 級、2 級受験者計 326 名に、テスト B を同 2 級、3 級受験者計 380 名に、テスト C を同 3 級、4 級受験者計 362 名にモニター受験してもらい、その結果から等化係数を推定し、各級ごとの困難度および識別力パラメタ推定値を共通尺度上の値に変換するという手順で行った。分析の結果、以下のことなどが明らかにされた。

1. 項目困難度の分布は類ごとに異なっていた(図1~図3)。
2. 読解・文法類を読解と文法に分解した場合、読解では2級と3級の間にギャップが見られた(図4)。
3. 受験者の特性尺度値は、どの類も段階的に重なりを持って推移していた。
4. 「中国語」「韓国語」「その他」母語話者グループを分けて分析した時、「その他」が代表する「非漢字圏」日本語学習者が「文字・語彙」、「読解・文法」において3級受験者の能力水準から2級受験者の能力水準に達するためには、「中国語」「韓国語」グループに比べてより長い期間を要する(表1)。

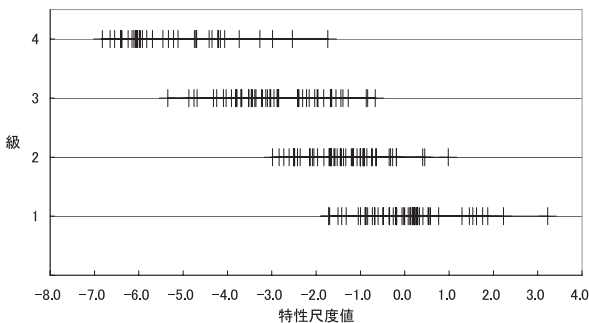


図1 文字・語彙項目困難度分布

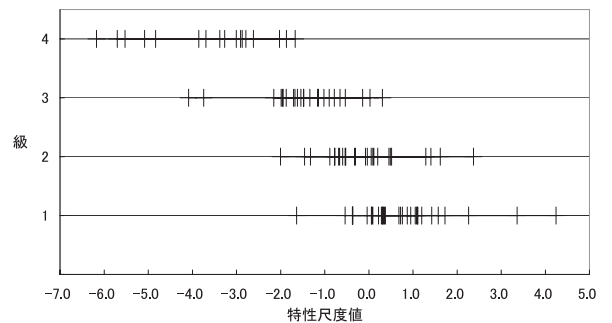


図2 聴解項目困難度分布

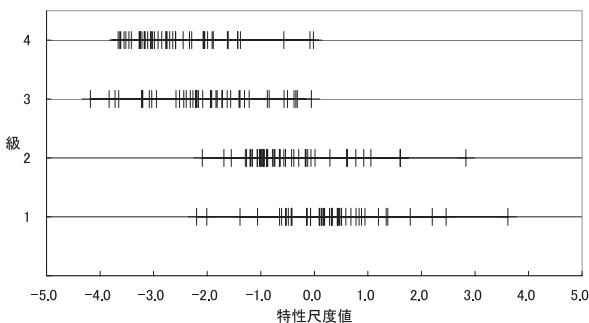


図3 読解・文法項目困難度分布

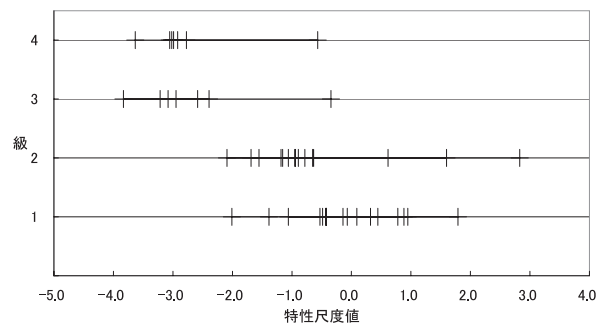


図4 読解項目困難度分布

表1 JLPT2級, 3級受験者の各類別/母語別 JLPT 特性尺度値平均と標準偏差

類	母語								
	中国語			韓国語			その他		
	2級	3級	差	2級	3級	差	2級	3級	差
文字・語彙									
平均	0.53	-1.18	1.71	-0.34	-1.82	1.48	-0.51	-1.51	1.00
標準偏差	-1.06	-1.08		-1.09	-1.17		-0.96	-1.16	
聴解									
平均	-0.15	-1.42	1.27	-0.01	-1.39	1.38	0.76	-0.56	1.32
標準偏差	-1.06	-1.00		-1.16	-1.05		-1.39	-1.29	
読解・文法									
平均	0.06	-1.43	1.49	0.15	-1.78	1.93	-0.31	-1.19	0.88
標準偏差	-1.03	-1.27		-1.25	-1.29		-1.01	-1.23	
受験者数	28,718	25,506		20,268	18,264		9,058	13,699	

## 2. 2. 日本語能力試験‘Can Do’ statements (試行版)の開発と尺度化

「2. 1. 垂直等化」で述べたモニター試験と同日に同じ受験者合計 1068 名に対して日本語能力試験‘Can Do’ statements (以下, JLPT-CDS) (試行版)の調査を行い, CDS 特性尺度を構成して, 各受験者の日本語能力試験共通尺度における特性尺度値と CDS 特性尺度における CDS 尺度値を利用して, JLPT と JLPT-CDS との対応づけを行った(野口・熊谷・大隅・石毛・長沼, 2006)。また, 同時に CDS (試行版)と CEFR-DIALANG とを対応づける試みも行った(大隅・野口・熊谷・石毛・長沼・和田・伊東, 2006)。

JLPT-CDS (試行版)各項目と日本語能力試験の得点段階(各級認定段階)との対応づけを行った結果のうち, 「聞く」については表 2 に示す通りであり, 全体として見ると, 全体 20 項目のうち, 4 級合格水準から順に, 2, 12, 6, 0 項目となっている。

なお CEFR-DIALANG との比較対照については, 現時点では順序性の比較に留まる。JLPT-CDS と CEFR-DIALANG 間ではほぼ同じ内容を表していると思われる statements が〈聞く〉20 項目中 6 項目, 〈読む〉同 9 項目, 〈書く〉同 10 項目あり, 〈聞く〉〈書く〉については両尺度における順序性が一致したが, 〈読む〉に関しては一致しておらず, 今後の研究課題である。

## 3. おわりに

以上, JLPT で行われている調査研究の中から一部を選び, その要約を報告したが, これらはいくまでも現在の到達点である。さらに学術的な研究・調査を進

表2 日本語能力試験 'Can Do' statements (試行版)「聞く」技能項目と日本語能力試験との対応

番号		JLPT-CDS	JLPT
		特性尺度	合格
18	専門的な話題に関する議論や討論を聞いて、重要な部分に加えて細部まで理解できる。	0.97	2級
9	様々な話題に関する講義や講演などを聞いて、細かい内容まで理解できる。	0.81	2級
7	時事的な事柄など様々な話題に関するニュースを聞いて、細かい内容まで理解できる。	0.59	2級
14	様々な話題に関する周りの人の会話を聞いて、細かい内容まで理解できる。	0.28	2級
10	フォーマルなパーティーなどでのスピーチを聞いて理解できる。	0.17	2級
5	思いがけない出来事や状況での説明を聞いて理解できる。	0.09	2級
1	美術館や博物館などで、展示物についてのテープや人による説明を聞いて理解できる。	-0.07	3級
20	くだけた言葉が使われているテレビ番組や映画を見て、細かい内容まで理解できる。	-0.17	3級
13	時事的な話題に関する周りの人の会話を聞いて、大まかな内容が理解できる。	-0.25	3級
8	関心のある話題に関する講義や講演などを聞いて、大まかな内容が理解できる。	-0.38	3級
16	身近で日常的な話題に関する議論を聞いて、話の流れが理解できる。	-0.62	3級
17	学校や職場などでの議論や討論を聞いて、重要な部分を判断し、理解できる。	-0.70	3級
4	学校や職場、公共の場所でのアナウンスを聞いて理解できる。	-0.81	3級
6	身近で日常的な話題や関心のある話題などに関するニュースを聞いて、大まかな内容が理解できる。	-0.84	3級
3	電器店、デパートなどでの製品の説明やレストランでのメニューの説明を聞いて理解できる。	-0.96	3級
19	身近で日常的な内容のテレビ番組や映画を見て、大まかな内容が理解できる。	-1.00	3級
12	身近で日常的な話題に関する周りの人の会話を聞いて、大まかな内容が理解できる。	-1.22	3級
15	会話を聞いて、敬語やくだけた言葉を使っていることが理解できる。	-1.55	3級
2	乗り換えや道順、手順や操作などの説明を聞いて理解できる。	-1.98	4級
11	店やレストラン、郵便局、銀行、駅などでの日常的な表現を聞いて理解できる。	-1.99	4級

め、各関係委員会等での議論、および、今回のような機会における意見交換を続けながら最終的に方向を定めて行くものであると考えている

## 文献

大隅敦子・野口裕之・熊谷龍一・石毛順子・長沼君主・和田晃子・伊東祐郎(2006年8月26日)。「日本語能力試験 Can-do-statements (試行版)とCEFR-

Dialang との対応付けの試み」第5回国際日本語 OPI シンポジウム (ベルリン：ベルリン日独センター).

野口裕之・大隅敦子・熊谷龍一・石毛順子・長沼君主 (2006年8月24日～26日). 「日本語能力試験 can-do-statements (試行版) の IRT 尺度化と日本語能力試験の得点段階との対応付けの試み」第5回国際日本語 OPI シンポジウム (ベルリン：ベルリン日独センター).

野口裕之・熊谷龍一・大隅敦子 (2007). 日本語能力試験における級間共通尺度構成の試み『日本語教育』135, 70-79.